

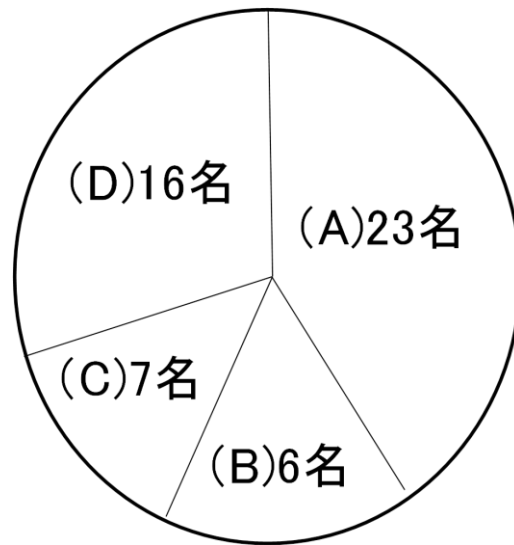
第4章 日本語教育支援者について (養成講座を含む))

支援者募集には、外国人児童生徒の状況を知ってもらい、支援の意味と支援者にとってのメリットの理解を共有することが有効である。

第4章の構成

- 4. 1 支援者の属性～支援者はどういう人たちか
 - 4. 2 日本語学習支援者養成講座の構成
 - 4. 3 支援者をどのように募集するか
-

4. 1 支援者の属性 (例:伊勢崎地域のNPO3団体の合計 2013年度)



- (A): 教員、日本語教育能力検定有資格者、日本語講師養成講座420時間修了者、指導助手、塾講師、臨床心理士(教員、指導助手、塾講師は元の人を含む。また外国教員資格者含む)
(B): 語学検定有資格者、保育士、医療通訳士、行政書士
(C): 研究所職員、NPO職員、経営者
(D): 大学生
いずれも、日本語学習支援者養成講座修了者を含む。

実際の事例では、支援者の半数近くが、日本語もしくは教育に関する何らかの資格や経験を有する専門性を持った人たちである。

支援者のレベルアップも重要であり、養成講座の開催に加え、毎回の支援活動の中で、例えば日本語教師養成講座420時間修了者などによる指導も行なう。

また次世代の支援者養成も行うことで長期的な視点での支援活動となるようにする。実際の事例では熱心な教育学部の大学生が1年間の支援経験を積んで、外国につながるのある児童の日本語教育支援サークルを自分の大学に立ち上げた。支援の拠点が增えることは、その近傍の児童生徒が来やすくなり支援の拡大となる。また、そのようにして出来たサークルを必要に応じ(特に立ち上げ時には)支援する。

教育学部の大学生にとっては、問題が凝縮して現われている子どもの教育支援に関わることは将来教職に就いた際に生きてくる。

また、支援を受けて育った外国につながるのある子どもが大学生や社会人になり、古巣の支援活動に参加してくれるようになることを望むものである。

4. 2 日本語学習支援者養成講座の構成

第1ステップ

基本編(子ども～大人までの日本語指導の基本)



第2ステップ

子どもについての日本語指導



第3ステップ

日本語ゼロの外国人対象の日本語指導

支援者は毎回支援の度に多様な生徒とのやりとりの中で、日本語指導や教科学習支援など、これで良いのだろうかかと自問することも多い。また、生徒に少しでも最適な指導方法を工夫したいと思うこともしばしばである。

現場での経験や疑問を立ち止まって整理し、レベルアップを図る機会が講座である。講師には、大学で日本語教育を専門とする方を迎えることが多い。

講座の組み立ての事例として、第1ステップとして子どもから大人までをカバーする日本語指導の基本を学び、第2ステップとして子どもに特化した日本語指導を、さらに第3ステップで、日本語ゼロの外国人への指導について学ぶ、という年間の組み立てを実施した。

講座を企画するにあたっては、最初に講師の方と打合せを持ち、当方の希望を伝えるとともに講師の方の助言を入れて企画する。それを基に受講生募集の案内を行う。講座終了時には受講者にアンケートをする。

講座はそれ自体が目的ではなく、講座で学んだことをその後はどう生かすかが大事である。その意味で受講者のメールアドレスなどコンタクト先の情報も得ておいて、講座後のネットワーク作りにつなげることが大事である。

4.3 支援者をどのように募集するか

～ 人脈、クチコミ、ネットそして問題と活動意義の共有 ～

平日の継続支援活動の場合、支援者がなかなか見つからない
初年度に実施したこと

近隣の大学に掲示

ネットに掲載

人脈

翌年度に実施したこと

学生向けに活動の意味
とメリットを説明した文書
を用意

問題の共有

地元大学の熱心な先生と
知り合いになれた

多くの支援者にとって、土曜であれば参加しやすい。しかし、学校内支援のような平日の日中の場合は、支援者を見つけるのが難しい。実際の事例では、近隣の大学の大学生が参加してくれている。但し、大学の授業のスケジュールの合間を見ての参加であることは理解しなければならない。あくまでも大学の授業優先で無理のない範囲でという前提をいつも明確にしておくことが参加のしやすさとなる。

教育学部の学生の場合、将来教員を目指す学生が多いので、外国につながるのある子どもの支援の意味を事前に説明することで、良い動機づけとなるし、将来教職で役立つ経験となる。外国につながるのある子どもには教育上の問題が凝縮して現われるので、そこでの問題の理解や多様性の理解は、将来日本人の子どもの教育に携わる際に役立つことになる。

また、できるだけ日本語学習支援者養成講座などにも参加してもらうことで、実践での疑問などを解消しレベルアップとなる。熱心な学生は大学内での外国人児童の日本語支援サークルを立ち上げた。それに続く学生も実践に参加することで、サークルの継続性が確保されている。